

限界としての死

池上哲司

今、小澤さんが僕の誠実性とか何とか言っていました。真っ赤なウソでね(笑い)。この話は全然考えてなかったんだけど、あんなこと言われたので一言言いたくなりました。私が行った大学では専門に二回生から三回生で移ります。どこに行こうかと考えている頃、十二月だったと思いますが、夕方の、京都の十二月はもう真っ暗で、今日は四時二十分くらいですけれども、一部屋に学生たちが集まってオリエンテーションがありました。その教室の一番後ろで友達と黒板に寄っかかりながら聞いていて、「池上、お前どこに行くんだ」って言われて、「心理学か倫理学に行きたい」って言いました。彼に「お前はどこに行くんだ」って言ったなら、やっぱり「心理学か倫理学」で、オリエンテーションのときに倫理学の先生が出て来られて、「倫理学っていうのは偽善者がやる学問ですが、私も偽善者です。あなたの方の内偽善者である人は私と一緒に勉強しましょう」と言われ

て、それを聞いて「そうだ！」って私は倫理学に行ったんですね。だから、あなた方ぐら
 い、二十歳前後の頃に「偽善者である」という先生に惹かれて倫理学に行ったので、誠実
 な人間であることは到底ありえないのです。そのときに私の隣で「倫理学か心理学に行き
 たい」って言っていたのが松沢という男です。今日お昼のニュースを見ていたら文化功勞
 者に選ばれていました。チンパンジーの研究で、京大の霊長類研究所にいる男ですけど
 ね。彼は心理学に行つて、翌年の四月にキャンパスで再会して「お前どこに行つたの？」
 「心理学。池上は？」という具合でした。ちょうど今日ニュースで見てたら出てきたので、
 オリエンテーションの頃を思い出しました。私の紹介にあつた誠実さということについ
 て、そうじゃないということをまず言つておかないと間違つた観念で見られると困ります
 から。

今日は看護学の学生さんがいらつしゃるといふことですが、私の女房が看護婦だつ
 たんです。だから看護師さんの仕事が大変だといふことは分かります。やりがいのある仕
 事であるといふことはそうですけれども、将来、看護師さんになつたときに、自分で全部
 背負いきることをしようとしなくて下さい。これは臨床心理の職業もそうですけど、カウ
 ンセラーも自分一人で背負い込もうとすると大変なので、そのときには自分一人で背負い

限界としての死

込まないで、必ず誰か友達とか、誰でもいいですから一番心の許せる人に相談をするというかたちで対処して行って下さい。これは極めてまともな忠告です。そして、さらに大切な忠告があります。女房に言わせると私というのは一緒に暮らすのになかなか大変な相手らしいので、もしあなた方も将来結婚されることがあつたら、哲学をやつてる男は選ばない。哲学、それから仏教学とかね、真宗学…、そういう怪しげな学問をしている男は選ばないというのが、大きな、これは極めて役に立つ忠告なのでこれだけは忘れないで下さい。宗教学講座で池上がなんか言つてたけど、そうそう、哲学系の男は旦那に選ばない方がいいって言つてたつて。それだけ覚えて帰つてくれたら今日はOKですから。

ちよつと真面目な話をします。今日は題が「限界としての死」ということで、まさか一回生の人がこんなにくささんいると思わなかつたので、哲学者の話も入れて話そうと思つていましたが、なるべくそういうところは省いていくようにします。

小学校の頃だつたと思いますが、初めて人間が死ぬということを知りました。斜め向いの家のおばさんが死んで、「人は死ぬんだなあ」つて。そこまでで終わつたら良かったんですけど、「待てよ」と思つたんですね。「おばさんが死ぬつてことはうちの親も死ぬのかな」。そこまではいいですね。よくはないけど、まだいい。そこから、「ひよつとすると

自分も死ぬんだな」と思ったんですね。小学校のときにそれを考えて「これはまずい」と思ったんです。死にたくないですから。あなた方も必ずどこかで、小学校か中学校、もっと早く幼稚園の頃にそういうことを感じた方もおられるかもしれません。「自分は死ななきゃいけない」だけれども「死にたくない」。そういう思いで、私なんかは、その晩、布団にもぐってひたすら「死にたくない」と思って、「死んだらどうなるんだろう」といろいろ考えた。だけれども、子どもですからそのうち眠ってしまって、翌朝はもうケロツと忘れてまた外で遊んでるということがありました。でも私にとっては、そのとき一人で布団の中で思っていたものがずっと続いていたのでしょう。後にそれに気づかされることになります。

中学校、高校、予備校、大学と、何年ぐらいですかね、十二歳のときから大学院の頃までです。三十前まで、その間ずっと一緒だった男が、私は東京の浅草で生まれて浅草に今でも住んでいます。彼はうちから近い蔵前という問屋街で生まれた子どもなんですけど、二十九のときですかね、自殺をしてしまったんです。そうすると、東京から京都に来ている人間というのは少なかったので、東京へ帰ると高校の友達たちが「池上はあいつと一緒に京都にいて近くにいるのになぜあいつが自殺するのを止められなかったんだ」と言

限界としての死

われました。その友人の死、自殺というのに出会って、小学校の頃の何となく「恐いなあ」と一人で布団の中で思っていたのがぶり返して、それが結びついて、「一体、死とは何だろう」と考えるようになってきたんですね。自分の死とか友人の自殺が、私が哲学を勉強する決定的な要因になったとは言えないのですけれど、一つの要素としてはあったと思います。

みなさんも必ず一回は「人間は死ぬ」「自分もいつかは死ぬ」という、悩みというか問題、恐れに出会ったことがあると思うんです。そんなのいくら考えても分らないんですね。臨死体験という本がたくさん出てて、病院で突然、自分の身体から魂がすつと抜けて、天井のあたりに行って、天井から見ると、下でお医者さんたちが「早く輸血しろ」とか看護師さんたちに言ってる。そういう場面が見えて、自分の身体は下のベッドに横たわっているけど自分は天井の上の方から見てる。そのうちフーッとそこから抜け出して、暗いトンネルの中を抜けていくと、その先に明るく開けた野原が出てきて、その野原で何とも気持ちが良くて、もっとあっちに行こうとするんだけど、そのときに誰かから「そっちへ行っちゃダメだ」とか、「お前は帰りなさい」と言われて、そっちへ行けないで、先の方にじいさんやばあさんの姿、死んだ人の顔が見える。「あっちへ行けたらどん

なにいだろう」と思いながら、でも「帰れ」と言われたので帰ってきたら、みんな周りで「あ、生き返った」と言われて、お医者さんや家族たちがのぞき込んでいたという。だいたい世界共通して同じ様な臨死体験があるんですけれども、でもそれは「死ななかつた」んですね。「生き返った人」なんです。生き返った人の体験でしかないわけで、死というものは、残念ながら誰も体験することはできません。

エピクロスという哲学者がいて、こう言っています。「死はわれわれにとつてなものでもないと考えることに慣れるべきである。というのは、良いものと悪いものは全て感覚に属するが、死は感覚の欠如だ」。要するに、死んでしまったら何も感じないんだから良いも悪いもないんだと。そして死は経験することができない。ですから、生きている限りわれわれは死なないし、死んでいるときは経験できない。ある意味でそれ以上先へは行けない限界としての死。昔から死というものに出会って、それについて考えようと思った人間はかならずそこにおつたんです。エピクロスは、経験できないんだからそんなこと気にしなくていいって言うんです。死というのは、生きている間はやって来ないし、死んだときには経験できないんだから、死が恐ろしいものかどうかなんて不安になつたり、悩んだりする必要はないよって、エピクロスは言ってくれている。けれども、みなさん方の

限界としての死

内で、「これでもう死は考えなくていいんだ、ラッキー」って納得してくれる人はいいと
して、私はどうしても納得できません。

そんなこと言ったって、やっぱり死というのをわれわれは考えてしまう。死というの
は、われわれがこうしてここに「ある」ということから「ない」というところへ行くので
すけれども、それと同じような経験をわれわれはしています。ペクトルが違うのですけれ
ども。私には三人子どもがいて、一番下の娘がアルバムを開いて、私と女房と上の二
人が映っている写真を見て「自分がいない」って言うんです。「おかしい」って。「私がい
ないじゃないか、どうしたんだ」と。それに対して「お前はまだ生まれてなかったんだ
よ」と言うんだけど、その一番下の娘は納得しない。生まれてくるといのは「な
い」から「ある」へやってくるということです。あなた方もそういう経験をしたかもしれ
ないですけど、写真を見て、お兄ちゃんやお姉ちゃんはいけるけれども、自分は映ってな
い。これは何だ。われわれは生きている限り、ここにこうして身体を持ってあなた方もそ
こに座っていますよね。生きている限り自分が「ない」ということは理解できないんで
す。理解したいんですよ。理解したいんだけれども、理解できない。エピクロスのように
言われても、「そうだな。確かに論理的にエピクロスの言っていることは正しい」とは理解

できる。しかし、「理解できた」としても「受け入れ難い」んですね。生きているということは「今ある」ということです。この「ある」ことから、「前なかった」こと、それから、「将来なくなる」こと、この二つの「ない」ということを、人間は論理的には理解できるけれども感情的にはどうしても理解できない。あるいは自分で「そうだな、そうだからこういうふうに生きよう」と納得して受け入れていくことがどうしてもできないのです。そういうのが「死」というものの独特なあり方なんです。

哲学者たちも死というものについていろんなことを言っていますけれども、最終的にはどうしても分からない。プラトンの『パイドン』という本は、「われわれの魂は不死であってほしい」という、いわば壮大な仮説というか信念の中で語られています。哲学的には魂が不死であるということ、あるいは死んでから魂、われわれの人格というものが生き残る、続くということは残念ながら言えません。いつも「ここから先は哲学的には言えない」「ここから先は信念の問題だ」「ここから先はどうしても象徴的なかたちでしか言えない」と哲学者たちは書いています。論理的なかたちでは、絶対に死の先は言えないんですね。死という限界を飛び越えることはできない。飛び越えることができないから、やっぱりエピクロスが言っているように、気にしないで生きようと思っただけいいん

限界としての死

でしようけれど、私の場合は生きるということに執着しているのか、やっぱり嫌なんですか。納得できない。自分が無になるということ、それがどうしても受け入れ難いというのがあって、それですつと考えてきました。

日高敏隆さんという、もう亡くなられましたけど動物生態学者がしまして、「死は生きるということの一つのプロセスとして、あるいはわれわれの遺伝子によって生まれてくることからプログラムされている」と、「それ以上のものではない」と生物学の立場から言われます。それは理解できるんです。プログラムされているんだから生と死が断絶しているわけではなくて、生のプロセスとして死がやってくる。それだけのことだと。それでいいんだけれども、やっぱりそれでも自分が死ぬということ、無くなるということが、すっきり、クリアに、「OK、よしこれで生きていける！」というふうには思えません。まだどうしても納得できない。

じゃ、どうするかって言ったときに思い出されるのが、松田道雄というお医者さんであり、批評家です。松田道雄さんは「自分が無になるということに出会ったとき、人間にとって問題になるのは、どうやって無になるときまで生きていくか。それが人間にとって大切なことなんだ」と言い、人間には二つの生き方があるって言います。一つは、自分の名

を残して死んでからもみんなから思い出してもらえるように、そういう自分の名を残そうという生き方。もう一つはそんなことは気にしなくて、自分の名前なんか残らなくてもいい、家族たち、身近な人々と一緒に暮らしていく、その身近な人々との生活、生きていくということを豊かなものにしたらいんだと考える生き方。大統領とか首相とか、そういう人は名を残すかもしれない。けれどもわれわれ、少なくとも私の父親や母親の場合、父親は浅草で商売を営んでいて名を残すようなことはなかったし、おふくろはその女房として生きていて、どこにも名前が出ない。ですからインターネットで、例えば、私の父親の名前を検索かけても出てこない。私の母親の名前を検索かけても出てこない。そういう出てこない人の方が圧倒的に多い。それがわれわれの普通の人間というか、普通の市民の一生涯だと思っています。松田道雄さんは、市民として生き、死んでいくためには名を残そうなんて思わなくていい、身近な人間、周りの人間と共に生きること、それを豊かにし、自分の個性を最大限に活用できる、発揮できる生き方が、一人の市民としての望ましい生き方だろうと言っています。

正直、昔それを読んだとき、松田さんという人は信用できる思想家だと思っていましたが、すっと納得できませんでした。死に際して死んでいくのは自分であって、たとえ親し

限界としての死

い者であっても、自分に代わって死んでもらうわけにはいきません。同じように、生まれてくるとき、われわれは一人で生まれてきます。そして、われわれは死んでいくとき、私として一人で死んでいくわけです。どんなに親友がいても、どんなに愛する人がいても、死ぬのは私です。われわれは「私の死」を死んでいかなくてもはいけない。そうなる松田道雄さんの「死を迎えるまで周りの親しい人々との共に生きる」ということを豊かにする」と言われても、それで自分が死んでいくことを納得しろと言われてもできないなあ、私はその当時思いました。やっぱり死んでいくのは自分一人じゃないかと。どんなに「ああ、可哀想だなあ」と思ってくれる人がいても、その人が死んでくれるわけじゃなくて、この私が死ななきゃいけない。ですから、そのところが分からないな、どういうふうに考えたらいんだらうなというのが残ったままで、ずっと今まで考えてきたわけです。今でも、生きるのはこの私が生き、死ぬのはこの私が死ぬ、それは間違いないと思います。けれども、松田さんの本を読んだときと今とは私の考え方が変わってきています。それはどうということかというのを次にお話します。

一回生ですからあまり哲学者の名前を言っても分からないかもしれないですね。もし哲学に興味がある人がいたら、その人はどこかで本を読んでくれたらいいんですけど、社会

哲学者のジンメルとか、あるいはシェーラー、十九世紀の半ばから後半に生まれて二十世紀の半分からいまで生きていた人です。そういう人たちが死というものについて考えているんですね。彼らがどう考えたかという細かい点は大幅に端折ってお話します。例えば、みなさん「 $2 \times 2 \parallel$ 」を考えてほしいんです。だいたいみんな「4」だと思ってしまう。へそ曲がりな人は「5」だっという人がいるかもしれないけど、ほとんどの人は「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」だと思います。その「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」はどこにあるかというと、どこにもないんですね。「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」だというのは、今から三千年も四千年も前、エジプトのピラミッドを造ったりしていたときから「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」なんですね。これからわれわれが、例えば百年経ったとき、ここにいる人たちはほとんどみな壊滅というか、いないでしょうね。それこそ「無」になっていると思います。私なんか後二十年ぐらいしたら確実に「無」になっているでしょうけれど、そうなった後でも「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」なんです。今、「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」という数学的な真理の話をしましたけど、それは時間にとらわれないし、空間も場所も関係ありません。南極で「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」であるのも、北極で「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」であるのと全く変わらないです。

そういった数学的な真理というのは、いわば時間を超えています。時間を超えているん

限界としての死

ですけれども、その時間を越えたものをわれわれは「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」だということを理解している。われわれは個体としては有限なんですよ、せいぜい百年。百年生きると朽ち果ててしまつて元素に戻ってしまいます。だけれども、有限でいつか死んでしまうわれわれが時間を越えた「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」をどうして分かるのか？ と、哲学者はこれまで考えてきたんです。「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」が分かるのは、われわれが時間を越えるような働きを持っているからです。それを哲学者たちは「精神」と名前をつけました。精神というのは、光華大学の建学の精神とか、私だったら大谷大学の建学の精神と呼ばれるものです。と言っても、その光華大学の建学の精神を「見せてみる」と言われても見せられないですね。見せられないけれども「こういうものです」っていうのは何とか言える。そういうように人間の精神というのは、形にもならないものを、時間を越えていくものを捉えることができるのです。

精神ということをもう少し分かりやすく説明しましょう。さつきね、「哲学をやっている男とは結婚しないように」って言いましたけど、ひよつとして結婚しちゃうかもしれないですよ。そうなったら諦めてもらうしかないので、なぜ私の忠告にもかかわらず結婚してしまうかといったら、お互いに好きになつてしまい「この人しかいない」という

錯覚というか、思いこみに二人がとらえられてしまうからです。その結果、幸運にいうか不運にいうか「結婚でもしようか」という話になってしまふ。だけどそのときに、好きになるってことをよく考えてみて下さい。今まで好きになったことがある人はたくさんいると思いますけど、どうして彼のことを好きになったのですか。最初は格好いいとか、金持ちだからっていうのもあるかもしれない。でもあなた方みなさん、今日うちへ帰ってお母さんに聞いてみて下さい、「どうしてうちのお父さんと結婚したの」って。理由を五つ挙げなさいって言っても絶対に挙げられないと思いますよ。私も子どもに聞かれたときに「はずみだ」って言いましたが（笑い）。そんなもんです。女房は「魔が差したんだ」と言っていました。ちゃんと論理的には答えられない。

それはなぜかというと、われわれが人を好きになるということには（本当に好きになる）ときですよ。彼と付き合っているといるんな高い物が買ってもらえるからいいとか、タクシ―代わりに使えて便利だとか、柔道部の彼だったらボディガードになるからとかいいとか、そういうんじゃないかと、この人と一緒に暮らしていこうと思う、その気持ちというのには、実は、あなた方の精神の独特な働きがあるからなのです。その精神の働きがどこで生まれるかというと、それに答えるのは難しい。「ここ」って言えないですね。街を歩

限界としての死

いていて、「あ、あそこに精神が働いてる！」なんてそんなことは言えませんが。精神の働きは客観的に見ることはできないのですから。人と人が出会ったとき、出会って共に何かをする、デートでもいいですよ、映画を観るといいうのもいいですよ、そのときに精神の働きははじめて働き出し、交流するのです。「人を好きになるなんて直観だよ」「第一印象だよ」って言うかもしれないけど、第一印象とか直観っていうのは持続できません。あなた方と相手との間に精神の交流が起こるときに持続するんです。持続できないときにはそこに精神の交流が起こっていないということですよ。

そんな難しいこと言われても分からないって、じゃ、今度は別の仕方で説明しましょう。あなた方は夏目漱石の『こころ』という小説を読まれたことがあると思います。中学や高校の教科書の中に『こころ』があったと思います。なければ、夏目漱石の『三四郎』でもいいですけど、そういう小説を読んだときに、なぜ私たちは夏目漱石の小説が面白いと思うのでしょうか。夏目漱石の小説を読んで面白いと思うのは、実は、夏目漱石の精神の運動と、私たちの精神の動きがある所で共振し合う。音楽のバイオリンでも弦を弾くと、それ自体は大した音じゃないけど、バイオリンの木でできた胴体部分が共振して大きな音が出る。あれが物理的な空間での共鳴作用です。精神の中でもその共鳴作用が起こる

んですね。だからわれわれは夏目漱石の小説を読んでハラハラドキドキしたり、「なんでも三四郎、そこでこうしないんだ」とか、それは夏目漱石の精神の動きと私たちの動きが共鳴し合ったときに、「面白かったな」という感情が起こるんです。さっき言った、人を好きになるときも相手の精神と自分の精神との動きが、完全に一致しないでいいですよ、完全に一致しないでいいけれど、ある瞬間、そこで共鳴が起こったときに私たちには、この人は自分にとってかけがえのない人だということが分かるわけです。その共鳴する度合いが強ければ強いほど、あるいは長く持続すればするほど、この人は私にとってかけがえのない人だなと感じることになります。

「2×2＝4」ということがなぜ分かるか。人を好きになるということはどういうことか。小説を読んでそこでわれわれが感動したり、ハラハラドキドキしたりするのはどうしてか。それは全部われわれの精神の働きによるものなのです。今まではわれわれの精神の働きとしか言わなかったのですけれども、正確には夏目漱石の精神と私たちの精神の働きが共鳴しているのです。ある女の人と男の人の間の精神の動きが共鳴する。「2×2＝4」というのは、ここにいる人がみんな、精神の働きによって共鳴しうるものです。数学的な真理の場合には全部の人に開かれてはいるけれども、好きになるということは全部の人に開

限界としての死

かかれているわけじゃなくて、特定のある男の人と女の人に開かれている。あるいは今だったら男の人と男の人でもいいし、女の人と女の人でもいい、そういう特定の人。他にはその精神の共鳴は起こらないけれども、その二人の間では精神の共鳴が起こる。そういう場合が人を好きになったり、愛するという状態だと言えます。

じゃあ、分かったと。精神というのはそういう、少なくとも二人の人間の相互作用の中で起きているんだなど、あなた方が納得されたとして。納得しなくてもいいんですよ。あなた方がこれから、本当にこの人と結婚しようと思うときに、「ああ、池上が変なこと言っていたな」と思い出してくれたらいいんです。今分からなくても、こういうことかなって納得してくれる人もそのとき初めて出てくると思います。

精神の相互作用というところまでは納得してもらったとして、その次なんです。哲学者たちはその精神というものを、こういうふうに考えたんですね。われわれはある人を、例えば、池上とか、小澤さんとかを「これこれこういう人だ」と考える。その人が一メートル七十七センチ、体重が五十六キログラムとか、男だよ、髪の毛が白いよ、それが池上だというふうに見えるんです。あなた方は「一番親しい友達を紹介してよ」って言われたときに、眼鏡をかけている、髪の毛が長い：って言うかもしれない。だけれども、それでその人を

話したことにはならない。われわれがその人っていうのを哲学では「人格」と言います。その人をその人たらしめている、さっきの松田道雄さんの言葉だったらその人の「個性」という言葉でもいいですね。個性と言ってもいいし、個性性と言ってもいいでしょう。その人格の自身は何かというと、さっき言った精神の作用、精神の働き方がその人格を形成しているというふうに、これまでの哲学者は言います。

ここで、もう一回、死というものに出会ったときのことを思い出して下さい。さっき、家の斜め前のおばさんが亡くなって、年の近い親も死ぬのかな、それから人は死ぬのかなって思ったことをお話ししました。それから、ずっと中学から一緒だった友人が自殺してしまっただということもお話ししました。例えば新聞を見ていて、あるいはニュースを見ていて、遠くの国で、例えばアフリカで、飢餓のため何万人が亡くなったというのを見ても聞いても、友人の死と同じようにわれわれはそれを受け取ることはありません。確かにたくさんさんの人間が死んでそれは大変なことだろうと思うけれども、しかし、例えばアフリカで見知らぬ人が五万人死んだことと、たった一人の友人が死んだということ、自分にとってどちらが強いインパクトを与えるか考えてみて下さい。私にとっては、全地球の人類が自分を残して全て死んだってなると話は別ですが、見知らぬ五万人が死んだのと、友人が死

限界としての死

んだのを考えたとき、圧倒的に友人の死が私にとってはインパクトが大きく感ぜられま
す。

なぜそんなことを言ったのかというと、実は、われわれが死というものを自分のものとして考えるようになるのはどうしてかということと関係してくるからです。ランツバークという人の『死の経験』で、彼は「われわれが死を、われわれも死ななきゃいけないということを確信するのは、全然知らない、見知らぬ人の死を、新聞で、あるいはテレビで、ラジオで聞いたり見たりすることによってではなくて、実はわれわれの隣人と呼べる、極めて傍らにいる人の死によってである」と言っています。物理的に傍らにいるということではありません。「存在として、精神として自分の傍らにいる人の死というものによって、われわれは自分の死というものを、そこで経験するのだ」と言われています。ランツバークの考えでは、人間が独自のものになればなるほど、その人間にとって死というものは重いものになる。ですから、遠くの所で五万人死んだ、たくさん死んだということ自体は大変なことだけれども、友人が一人死んだ、その方が私たちにとって切実であると言ったのは、要するに、われわれと個人的な関係を結んでいた友人の死が、われわれの死をわれわれに気づかせるからです。自分にとって死がキリキリとキリでもみ込んでくるようなその

痛さは、われわれの個であることが深ければ深いほど強く感ぜられます。そして、われわれの個であることを成立させているのが友人なのです。

たぶん、たぬきやきつねはわれわれみたいに「いつかは死ななきゃいかんのか」って悩んでいることはありません。自らの死を悩むのは人間だけっていうと、さっきお話した松沢というチンパンジーを研究している男が「池上、それは違う」って言いそうなので注意して言うておくと、ほぼ人間だけだと思います。本当は分からないですよ。たぬきに聞いてみたら本当は「私としても自分の死には悩んでるんです」って言うかもしれないけど、残念ながら今のところわれわれはたぬきとコミュニケーションを取る手段もなく、能力もないので、そこはカッコに入れたままにしておきます。「ソロモンの指環」というのがあって、それをはめると動物たちと話すことができる、そういう指環があったらいいのですけれどね。コンラート・ローレンツという人が『ソロモンの指環』という本を書いています。動物が好きな人はそれを読んだらいいと思います。特に犬が好きな人はコンラート・ローレンツの『人イヌにあう』を読まれることをお勧めします。そのソロモンの指環があれば、コンラート・ローレンツのようになれば動物たちの心が分かるんですけど、今のところそういうことができないので、たぶん人間だけ、ほぼ人間だけが自分の死という

限界としての死

ものについて、悩み、恐れ、そして不安を持つと考えておきます。

精神というのは相互作用であり、そして精神の働き方があなた方一人一人の人間の個性、あるいは独自性を色づけ、形成しているんだよと言いました。ランツバークの考え方というのは、まさにそういった傍らの人、隣人という、一番、お互いがお互いのことを思い、生き、そういう人との間で死というものが痛切に感ぜられる。一番身近な人々の死を通して、われわれは自らの死を確信するんです。確かに身体は一人一人みんな別です。どんなに愛し合っても、別々の身体で死んでいくしかないんです。松田さんの本を読んだときに、死んでいくのは私で、決して松田さんや家族が死ぬわけじゃない。私が死んでいくことと、家族と一緒に生きていくこととどういう関係があるんだろうと思いました。身体としてはあくまでも別々に死んでいくんです。けれども、精神は身体とは別なんです。われわれの精神の働きというのは、私と一番身近な人との間にいわば共同作業として、共同の働きとしてある。このことは「2×2＝4」だとか、人を好きになるといふこととか、小説を読むこととかで説明しました。

もう一つ言うと、これはちょっと難しいかもしれない。哲学でわれわれがプラトンとかカントとかデカルトという人の本を読むときに、何をしているかという、ただ字を読む

でいるんじゃないんですね。字は読みますよ、字を読まないで目をつぶったまま「うん、分かった。カントはこれだ」ってそういうことはできません。字は読んでるけど何をしてるかというのと、カントが歩いた通りに歩こうとする。物理的に歩くんじゃないくて、「思考の歩み」です。カントはこう考えて、こう考えて、こう考えた。その思考の歩みを私たちは後から、カントが今から二百年くらい前に書いたものを、カントが考えた思考の歩みを追っていくんですね。山登りのことを考えてもらったら分かると思います。最初にエベレストとか、高い山はルートを作るわけです。ルートを作っていたり、あるいはどうやってオーバーハングを越えていくか。最初の人が通ったのを、いわば自分が同じようなルートを辿ることによって、「前の人はここでこういうふうにやったんだね」と体得する。最初に登った人はオーバーハングを、あそこに手をやって、あそこにハーケンを打ち込んで、あそこに足をかけて分るけど、自分にはできないということも分かるんですね。それは最初に登った人間と自分との能力の差、精神的な能力の差があるからできないんです。カントが考えていったのを、われわれがその思考の歩みを歩いていくんですけど、そのときにどうしても分からないところが出てくる。カントはここからあっちに行っただけ、自分にはそこは渡れない。それだけ思考の飛躍がある。どうしてもそこが分から

限界としての死

ない。カントの本の字を読むけれども、カントの精神の働き方を、いわば真似ていくわけですね。昔、私は中学のときに軟式テニス部に入ってたんですが、入ると最初素振りばかりやらされる。素振りをやらされてラケットの動きと身体の動き、体重の移動とかを学ばさせられる。そうした練習の中でだんだん一つの動きを身につけていくのと一緒なんです。それは身体の運動ですけれども、精神の運動の場合、読むということを通して著者の思考の仕方をわれわれは覚えていく。カントの精神の働き方にこちらがいわば同調していく。シンクロナイズしていく。それがすでに故人となった哲学者の本を読むということ

です。

生きてる人の場合には、相手も生きてますから、こちら側もシンクロナイズしようとするし、あちら側も合わせようとするので精神の働きが共鳴しようということが起きるんです。相手が死んでしまうとこちら側からシンクロナイズするしか手はないんですけれども。われわれが自らの精神を形成していくときは、常に他者の精神とのシンクロナイズ、共振という形で精神の働きを身につけていく。われわれは身体としては別々に死んで行かざるをえず、かつ身体が死ぬと同時にわれわれの精神の働きもやみます。だけれども私の親友の中には、私と彼との間で精神の共鳴作用があったとすれば、その精神の共鳴作用と

いう仕方です、私の精神の働き方が含まれて残っているんです。

小澤さんに頼まれて去年の十一月でしたか、コンソーシアム京都で「死を見つめて」というタイトルで、死は見つめない方がいいよってというお話をしました。それがあってから去年の十二月二十日に、私の予備校からの友人を病院にお見舞いに行きました。そのとき彼は元気になっていたのに、一月には死んでしまったんです。彼は死んでしまったけれども、今でも死んだとは思えない。死んだんですよ、たしかに。葬式も行ったし、後から墓にも行きましたよ。行つて線香をあげたけれども、彼はまだ私の中に精神の働きとして生きています。例えば何かあったときに「彼だったらどう考えるかな」「彼だったらこう言うだろうな」という形で確実に私の中に残っている。身体は死んでいなくなっちゃったけど、私にとっては精神的には死んでいません。例えば、彼は東京に住んでいましたけれども、会うのはせいぜい年に一度ぐらいです。会わないとなると五年以上会わないこともありました。死んだのではなく、五年間会わなくて彼の生死が不明のときでも、私にとって彼は精神的に生きていますね。だから、肉体的に死んだとしても彼の精神の働きというのはわれわれの精神に刻印されているのです。それは否定できない。

要するに私が言いたいのは、われわれの人格というのは形成されていくとき、人格の中

限界としての死

核となる精神の働きというものがわれわれの中に生まれてくるとき、それは自分一人では生まれたいということです。必ず他者との間の相互作用の中でしか生まれたい。さっき言ったように、すでに死んでしまっているカントとかプラトンとか、そういった者とは相互作用は起こりえません。でもそのときに、彼らの精神の動きというものにわれわれはシンクロナイズして合わせようとして、どうしてもついていけないとか、ここまでについては行けるといいう仕方で、われわれの精神の働きが決まっていくなですね。生きてる相手のときにはこちら側から働きかけて、相手側から働きかけられて、その相互作用の中で精神が形成される。ですから、われわれの死というのは、身体としては個別に死んでいくしかない。だけれども、精神としては生き続けるという言い方しかできないですけど、生きていく可能性はある。あなた方がもつとも近い傍らにいる人、もつとも自分と精神的に共鳴しうる人が多ければ多いほど、あなた方の精神というのはそういった人々の中に残る、維持されていくということです。そんなこと言われたって、「身体が無くなつて腐ってしまったら、おしまいじゃないか」と思われるかもしれませんが。そうなんですよ、おしまいなんですよ。おしまいなだけけれども、死んでから後のことは分からないです。分からないけれども、私にとっては彼の身体は無になつても、共有された精神というのはわれわれ

の中に残る。ですから、中学校から高校、予備校、大学まで一緒に自殺した友人の精神の働き方、今年の一月に死んでしまった友人の精神の働き方も私の中に残っています。

今回は自殺ということについてはお話しなかったんですけど、自殺という問題も簡単に否定できません。私の友達が自殺してしまって、「池上、なんでお前がそばにいたのに自殺させたんだ」って言われて、「俺が自殺させたわけじゃない」って思ったけれども何とも言えなかった。でも、自殺するということを頭から悪いことかと言えるかというところでもないですね。そこところは哲学の別の問題であって、もしその問題に関心がある人で、哲学の本なんて読みたくないという人がいたら、ドストエフスキーの『悪霊』という小説を読んでみて下さい。その中でキリーロフという人が「神がわれわれ人間を作ったとしたら、作られた人間としてわれわれは自由ではない。だけれども人間というのは自由なんだ」「その自由であることを証明するために私は自殺をする」、そういう論理で自殺をします。自殺とか人間の自由という問題を考えたい人は、ドストエフスキーの『悪霊』と『カラマゾフの兄弟』を読んでみて下さい。後者の中に「大審問官」の章があって、その中に「人間が自由であるということはどういうことか」という議論がありますから。

限界としての死

さて、話をここまで聞いてきたけれど、やっぱり死ぬのは納得いかないという人がたぶんにいると思います。私も納得がいかないんですよ。よし納得できた、自分はいつでも死ぬことができる、とは言えないんです。やっぱり生きてたいなと思うんですよ。思うんだけれども、死ぬことは確実なんですね。そこのところを、じゃどうするかというと、こんなふうに今は考えています。

カントが偉いとか、ヘーゲルが素晴らしいとか、夏目漱石は偉い、面白い小説家だった、あるいは、あの二十歳のときに付き合ってた女の子は気だてが良かったとか、独特の感覚を持ってたなとか、われわれは思います。そのとき、その子の良さ、カントの良さ、夏目漱石の素晴らしさとかいったものは、その子自身、あるいは夏目漱石自身、カント自身には分からないのです。あなた方も自分の良さというのは自分では分からないです。自分の良さはここかなと思っても全然それはあてにならない。私自身は小学校時代にそれほど悪いことをした覚えはありません。けれども、何十年ぶりの小学校の同窓会に行くと、「お前にはひどい目にあった」って言う男がいるんですね。「何をしたの?」と言うと、「お前は、こうこうこういうことをした」。全然こっちは覚えてないのに、彼は覚えている。要するに、害を与えたとか、心に傷をもたらしただけというのは、もたらしただけ人間は覚

えていません。もたらされた人間しか覚えていない。それと同じで、その人の良さというのは、例えば「自分はつまらない人間だ。何もできない」そういうふうに通っても、そうじゃないんですね。他の人があなた方を見て、「あ、あの人にはこういう良さがある」「これは絶対にこの人にしかないものだ」というふうに、それは他の人が見てくれる。さつき精神の働き方が人格の中心を形成するんだと言いましたけれども、その精神の働きは、自分で見て分からないのです。カントを読むと、カントの精神の働き方って分かるんです。さつき言ったオーバーハングのところを、カントはこう行っただけでも俺は身体が付いていけない。手がそこまで行っても筋力がないから身体を持ち上げることができない。そういう仕方では分からないんです。カントと自分はどこが違うか。自分はどこが劣っているかは分かるけれども、カントよりも自分は優れているというところは分からない。カントより優れているところがあるとしても、それは自分には見えません。必ず他の人が見てくれるしかない。あなた方が自分で「自分にはどこにも取り柄がない」と思っているても、それは自分でそんなことを考える必要はないことで、他の人が「あなたはここが良いとこですよ」「ここが優れたところですよ」というふうに見てくれる。そういうものなんです。

限界としての死

人格というのは精神の働き方であり、精神の働き方は他の人によってしか確認できないんです。自分ではそれは分からない。さっき言った、私の友人が死んだけれども私の中には残っているというのは、私から見ても、彼の身体はもう無くなってしまつて実際に会うことはできないけれども、しかし、彼の精神の働き方は自分の精神の働き方の中に刻み込まれていますから、それを見ることはできる。あるいは感じることはできる。そういう仕方で私の中に生き残っているわけです。

私が死ぬときに、もう先に死んだ友人の精神の働き方も同時に死んでいく。私が死んだときに、今年の一月に死んでしまった友人の精神の働き方が、誰かに、例えば私の子どもに、あるいは私の女房に伝わるかというところ、たぶんそれは伝わらないでしょう。あなた方に元氣の出ないようなことしか言えないんですけど、精神としての、あるいは人格としての友人というのは、私と共に生きています。でもわれわれはいつかは死んでしまいます。個体としては消滅していつてしまいます。一月に死んだ男の精神の働き方というのは私の心の中に刻み込まれているし、何人かの友人の中に刻み込まれています。その友人たちや私は二、三十年で死んでしまいます。そういう人たちが死んでしまったときに、その一月に死んだ人間も実は同時にそのときに死ぬんです。ですから、哲学者たちは今まで、

精神は身体を超えていくことができるから、もしかすると精神は永遠に生きることができ
るかもしれないと考えてきたけれど、それはたぶん無理だと思えます。あなた方が死んだ
としても、あなた方の精神の働き方は、あなた方の側にいる人、隣人、親しい人、親友、
愛する人の中に生き残っていくと思います。だけれども、その愛する人も子どもたちもみ
んな亡くなったとき、あなた方も、私も、そのとき、精神としては死ぬのです。

やっぱり精神として永遠に生きたいって思う人がいるかもしれないけど、もうそれだけ
生きたら、今私は、精神としてもそれだけ生き残ることができたら、いつか私の精神とい
うものが誰かの中で次々と死んでいっても、それはそれで良いと思うんですね。少なくと
も自分の死は分からない。分からないけれども、親しい人たちが身体としては死んだけれ
ども、まだ自分の中に活き活きとして生きている。それだけで十分だろうと今現在は考え
ています。

ということ、おしまい。ありがとうございました。

——二〇一三年一〇月二五日——